



ヤノナミガタチビタマムシの生態と防除

ヤノナミガタチビタマムシ

ヤノナミガタチビタマムシは、タマムシ科に属し、体長3～4mm、背中に波形模様を持つケヤキの害虫です。(図1) 卵から孵化した幼虫は葉の内部に潜り、ケヤキの葉を内部から食害しながら成長し、初夏に葉の褐変・落葉を引き起こします。(図3左) 成虫になるとケヤキの葉を外部から主脈を残しながら食害します。(図3右) 被害木が大木の場合は、ヤノナミガタチビタマムシのいる葉(樹冠)の位置が高いために、薬剤散布で駆除することは困難です。

この害虫の被害は、山梨県内の各地で見受けられますが、近年、峡東地域で被害が目立っています。笛吹市八代町にある森林文化の森“稲山の森”では、激しい食害により夏にケヤキの葉が全く無くなる程の被害を受けたため、早急な対策が求められています。

このため、ヤノナミガタチビタマムシの生態を明らかにし、その生態を利用して被害を軽減する方法を確立するための研究を行いました。



図1 ヤノナミガタチビタマムシ成虫 ケヤキ樹皮下で越冬しているところ

ヤノナミガタチビタムシがケヤキに与える被害



図2は、ヤノナミガタチビタムシの被害を受けたケヤキの状況です。5月に出そろった葉が、越冬を終えた前年度成虫の食害、その後の幼虫の食害とそれに伴う落葉、新成虫による食害を受けています。被害が激しい場合は9月に丸坊主になります。



ヤノナミガタチビタムシの生活史

ヤノナミガタチビタムシは他の昆虫類と同様に、卵～幼虫～蛹～成虫と成長します。特徴は、“幼虫が葉の内部で育つこと＝潜葉性”と、“早期にケヤキの葉が落葉しても、幼虫は、蛹～成虫へと成長できること”です。

卵：5月中旬～6月に、葉の表に殻を持たない小さな卵が産み付けられます。(図4左)

幼虫：6月中旬～7月に、葉の内部に潜って葉を食べます。葉内部の食痕が模様を描く、いわゆる絵描き虫です。幼虫のいる葉は7月に落葉します。(図4中) (図3右)

蛹：7月中旬～8月中旬に見られます。幼虫のごく一部が樹についたままの葉で蛹となることもありますが、大多数は落葉内で蛹となります。(図4右)

成虫：8月に羽化・脱出して、ケヤキの葉を食害します。(図3右) 気温が下がり始めた10月にケヤキ樹皮下に潜り込み、越冬します。(図1) 翌年、ケヤキの開葉と共に活動を開始し、葉を食害しながら、交尾、産卵を行い、6月には姿を消します。



ヤノナミガタチビタマムシの防除

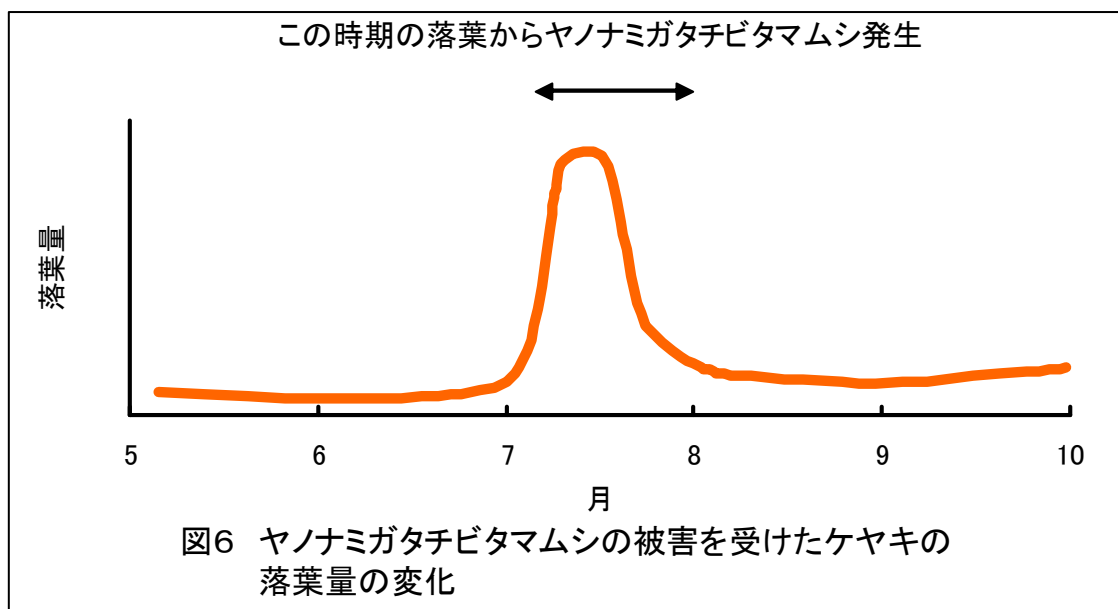
ケヤキはヤノナミガタチビタマムシの幼虫の食害に反応して、7月に早期落葉を起こします。(図3右) この落葉した葉の内部にはヤノナミガタチビタマムシの幼虫または蛹が入っており、落葉内で羽化した成虫が再び葉を食害します。

本研究の調査では、1 m²に落ちたケヤキ落葉から 1,800 頭ものヤノナミガタチビタマムシが発生することを確認しました。また、少量の落葉は一年中起こっていますが、ヤノナミガタチビタマムシの発生は、7月の早期落葉現象による落葉からのみであることを確認しました(図6)。

これらから、7月にケヤキの落葉を除去・殺虫処理すれば、被害を低減させられることが分かりました。山林で広域に渡って実施することは困難ですが、神社や公園のケヤキであれば、最良の防除方法だと思われます。

落葉後10日～15日で成虫が発生してきますので、落葉の除去は、1回であれば落葉ピーク(7月上中旬)の少し後を狙った7月の25日頃、2回除去できる場合は、7月の15日頃と7月30日頃が良いと思われます。作業条件が許せば、度々除去するのがベストです。

除去した落葉の殺虫処理は、燃す・土中に埋める・袋に閉じこめる等の方法が考えられます



監修：山梨県森林総合研究所
森林研究部
主幹研究員 大澤正嗣

編集：普及指導部
林業普及指導員 中桐秀晴
TEL 0556(22)8001 FAX 0556(22)8002